３月１５日　創世記１９章１～２９節　　【解説と黙想】

ソドムとゴモラ

ソドムとゴモラの位置を特定するのは難しいが、死海南部に当たる、今では水面下にある地域だと言われる。ロトが住み着いた頃は緑も豊かで町々も裕福であったようだが、今日の死海沿岸は太陽の焼けつく暑さと赤く露出した岩場で、湖の中にも生物はいない。このような風景に接して、イスラエルの民は神の裁きを思い起こしただろう。

旧約の預言者はイスラエルが政治的・道徳的に腐敗して、戦争によって国が滅びんとする状況の中で、ソドムとゴモラの名を挙げて民の記憶に訴えた（イザヤ1：7～10)。また、神の裁きによる破滅については、ノアの時代に起こった洪水に先例を見ることができるが（創世記６章以下)、そこで二度と洪水で滅ぼさないと神が誓った言葉により（9：11，15)、ここでは硫黄の火が町に降り注ぐ。イエスはこの破滅の記憶を元に、終末における罪人の命運を語った(ルカ17：26～33)。

ソドムの滅びは一晩の出来事として描かれる。前章ではアブラハムが町のためにとりなしを試みたが、町の者がこぞって「若者も年寄りも」押し寄せたのであるから、義人は一人もいなかったことになる。ロトには嫁がせた娘たちがおり（14節)、町には血縁関係も出来て、ロトの一族はすっかり都会生活に慣れ親しんでいる。しかし、ソドムの住人は彼を「よそ者」としか見ておらず（９節)、もはやソドムに下される裁きは決定的となる。

士師記19章ではソドムの恐るべき犯行が、イスラエル内部で再現される。これらの事件は、人間社会の罪の闇を象徴的に示しており、新約聖書では、無実のイエスに対して「十字架につけよ」と叫んだエルサレムがこれを引き継ぐ（イエスの十字架刑も一晩の出来事)。

夜明けは神の救いが動き出す時間（15節)。神の遣いはロトの家族を救出するために行動する。災害は信仰者も不信仰者も同時に破局に巻き込む。ロトが脱出する際に直面する最初の問題は、親族の不信仰(14節)。婿たちの拒絶は笑いを伴う（「冗談だと思った」14節)。イサク誕生の事例にまして、ここでの不信仰は致命的。第二の問題は、現在まで築いてきた生活そのもの。それらを投げ捨てて逃げなくては破滅に巻き込まれる（先のルカの箇所参照)。おじけづくロトに対して、御使いたちはロトと家族の手を引いて駆け出し、町の外まで彼らを引きずり出す（16節)。尚もロトは尻込みするが、ツォアルに逃げ込むまでの猶予をもらう。「小さい町」の強調は、大きな町（エリコ、ニネヴェなど）の罪深さとの対照。途中で振り返った妻は塩の柱となる（塩の柱は死海特有の自然現象)。裁きから逃れるためには未練を捨てなければならない。

町を捨て洞窟を選んだのは、天からの火を恐れたためか。光の届かない暗い場所での新たなアダムとエバ。その子孫が、イスラエルと国境を接する異教民族モアブとアンモン。

滅びを象徴する黒煙はゴルゴタの十字架へと続く。神の義を完全に表すそれは、罪人に対する裁きであると同時に、神に救いを求める者に用意された真の逃れ場となる。　（牧野信成）

《参照聖句》　ルカによる福音書１７章２６～３３節
《教理問答》　子どもと親のカテキズム　問２０～２５

３月１５日　創世記１９章１～２０節　【説教展開例】

ソドムとゴモラ

◇…… 単元のねらい ……◇

人間の罪に対する裁きは恐ろしいが、そこから救い出そうと計画し、行動されるのが神さまであることを知る。そして、神さまの言葉を信じることが命を救うことになることを心に留める。

「信じることは命がけ」

今日は「ソドムとゴモラ」という聖書でも有名な町の話をします。なぜ有名かといえば、神さまの怒りに触れて、天からの火で滅ぼされてしまった町だからです。今はたぶん、湖の底に沈んでしまっています。「死海」という湖です。そこは陸地にある湖ですが、とても塩分が濃いので生き物が生きることができません。周りも砂漠で、岩がゴツゴツしているばかりの本当に寂しいところです。そんなところに町があって、昔は緑も青々としていて、町にも人が大勢いて賑わっていたようです。アブラハムの甥であるロトはそこに住み着きました。けれども、その町は、本当の神さまのことを知らない、とても悪い町でした。

昔、神さまは、地上の人間があまりに悪いことばかりをするので大変心を痛めて、世界を洪水で滅ぼそうとしたことがありました。創世記の６章にあります。そこで、神さまはノアとその家族を選んで、箱舟を作らせて救い出したとありました。そのとき、神さまは、もう２度と洪水を起こして人類を滅ぼさない、と仰ったのですが、ソドムの町があまりにひどいのをご覧になって、その町を滅ぼすことにしました。

アブラハムはそれを知って、なんとか神さまに思いとどまってもらおうとして、もし、10人の正しい人が町にいたら滅ぼさない、との約束を取り付けました。では、ソドムには10人の正しい人が見つかったでしょうか。

二人の御使いが神さまの元からソドムにいるロトのとことを訪れました。御使いは人間の姿をしていますから、ロトにはその正体がわかりませんでしたが、ロトは二人をお客として家に迎えて、食事でもてなしました。それは夕方のことでしたが、夜になると、町中の人たちがロトに家を取り囲んで、その二人の客を自分たちに差し出せ、と大声でわめきはじめました。お客さんを守るのが一家の主人の責任ですから、ロトは代わりに娘たちを連れて行っていいから、そんなことはやめてくれと訴えましたが、町の人々はますます恐ろしい声で詰め寄って、家の中にまで入ってこようとしました。なんでこんなことするんでしょうね。想像できないかもしれませんが、時代が悪くなると町ぐるみで人間が恐ろしいものになってしまうことがあるんですよ。日本にもそういう時代がありました。私たちの周りでも起こるかもしれませんね。学校ではいじめが無くなりません。いじめられている子は死にたくなります。いじめている子は自分たちが悪いことしているなんて考え

ないで、笑っていたりします。人間には罪があって、その罪は神さまの怒りを引き起こすのですが、悪い時にはサタンの力が大勢の人間を引き入れて、恐ろしいことをさせてしまいます。

ソドムとゴモラはそんな町でした。正しい人は一人もいないことがわかりました。ロトとその家族は、そんな町にすっかり馴染んで暮らしていましたが、町の人々は「お前はよそ者のくせに偉そうに」なんて言いました。そこで、御使たちはロトとその家族を町から脱出させるために、人々の目をくらまし、その間にロトとその家族を外へ連れ出しました。

町が滅ぼされる、と知ったロトは、まず、お嫁さんに出した娘たちの家に行きました。けれども、家の人は、「町が滅ぼされる」と聞いても、「冗談だろう」と笑って信じてはくれませんでした。信じなければ、町と一緒に滅ぼされてしまうのに、信じてくれないなんで、どんなに悲しいことでしょう。でも、ロトにはどうしようもありませんでした。

結局、一緒に逃げることができたのは、ロトと妻と二人の娘だけでした。ロトはアブラハムのように、神さまを固く信じている人でもなく、勇気のある人でもありませんでした。御使いに言われてもぐずぐずしているので、御使いたちはロトとその家族の手を引っ張ってやっとのことで町の外へ連れ出しました。その時、神さまの言葉が告げられました。

命がけで逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。低地のどこにもとどまるな。山へ逃げなさい。さもないと、滅びることになる。(17節)

意気地がないのか体力がないのか分かりませんが、ロトは「できません」と言って、山ではなくて、近くの小さな町に逃げさせてください、と神さまに願いました。そうすると、神さまはその願いを聞いてくださって、ロトたちがその町に逃げるまで待ってくれることになり、また、その町は滅ぼさないと約束してくださいました。それは、ツォアルという名前の小さな町でした。そうして、恐ろしい夜が終わって、陽が上る頃、神さまは、大きくて恐ろしい町、ソドムとゴモラを天からの火で焼き尽くしてしまわれました。生き残っているものは一つもありませんでした。

先に、神さまは、「後ろを振り返るな」と言いましたね。つまり、ソドムの町が滅びる様子を見て、心を動かされて戻ろうとしてはならない、ということでしょう。町には残してきた娘たちがいるはずです。また、住み慣れた家や、大事にしていた宝物があったかもしれません。けれども、神さまの裁きから逃れて生き延びるためには、それらのすべてを諦めて、神さまが行けと言われた場所へ、急いで逃げてゆかねばならなかったのです。でも、ロトの妻は誘惑に負けて、後ろを振り返ってしまい、塩の柱になってしまいました。死海には、湖面に時々大きな塩の柱が現れます。最近はほとんどなくなりましたが、それを見て、イスラエルの人々は、ロトの妻のことを思い出したに違いありません。

ロトと二人の娘はその後、洞窟に隠れて住むようになりました。また、天からの火がやってくると恐れたからかもしれません。ロトの二人の娘から生まれた子どもたちは、それぞれモアブ人とアンモン人の祖先になりました。イスラエルが国を作った時に、隣に住むことになる人々です。

神さまはアブラハムとの約束の故に、こうしてロトとその家族を滅びる町から救ってくださいました。神さまは、悪を丸ごと滅ぼすほどの力を持っておられる方ですが、ご自分を信じる人を救うために、力を尽くしてくださるお方でもあります。だから地上に遣いを送って、神さまの言葉を伝えてくださるのですね。それを信じた人は、罪の裁きを恐れて、急いで逃げ出さなければならない。神さまが行けと言われたところへ逃げてゆかねばなりません。

「山に逃げなさい」と言われましたね。その山はどこか分かりませんが、多分、エルサレムの山です。そこには、イエスさまの十字架がずっと後に立つことになります。イエスさまの元に逃げなさい、ということなんですね。そうすれば、神さまの裁きから逃れて、自分の命を救うことになります。急いで、後ろを振り返らないで逃げなくてはならない。出来るだけたくさんの家族や友だちを連れて行きたいですよね。罪ある世界は最後には滅びる、なんてことを人に話しても笑われるだけかもしれませんけれども、聖書にある神さまの言葉を伝えて、信じる人も確かにいます。だから、できるだけ多くの人と一緒に、イエスさまの十字架のもとへ登っていけるように、神さまに助けを願いましょう。　（牧野信成）

《今週の暗唱聖句》

命がけで逃れよ。後ろを振り返ってはいけない。（創世記１９章１７節）

３月１５日　創世記１９章１～２０節　【幼稚科】

ソドムとゴモラ

ねらい

神の怒りと裁きを告げるソドムとゴモラの滅びの物語ですが、ロトと二人の娘たちを守られた二人の御使いの憐みの働き、その背後にあったアブラハムの執り成しの祈りへの神の応答の真実に集中します。

展開例

神さまは、ある日、アブラハムさんに語られました。「あなたは、お父さんのお家から離れなさい。わたしが教えるところに出かけて行きなさい。わたしはあなたと一緒に歩いて、あなたを祝福し、あなたの信仰を育ててあげよう」。こうして、アブラハムは奥さんのサライさんや親せきのロトさんを連れて旅に出ました。そのあいだに、アブラハムと神さまは仲良しになれました(ヤコブ 2:23「彼は神の友と呼ばれた」)。神さまとお友だちになれるのはすばらしいですね。それは、アブラハムが神さまの御言葉をちゃんと聴いて守ったからです。なにより、神さまの方からアブラハムさんに神さまがどんなことをお考えになっておられるのかをちゃんと教えて下さったおかげです。

ある日、神さまは、ロトが住んでいるソドムの町があまりにも皆が自分のことばかり考え、ケンカばかりしているという声を聞かれました。そこで、きちんと調べに行くことをアブラハムに教えました。

するとアブラハムさんは、神さまに必死になってお願いしたのです。「神さまは正し人が悪い人たちといっしょに恐ろしい目に遭うのを許されますか。神さまは、正しいことだけをなさるお方のはずです！」。さすが、神さまのお友だちだから遠慮がないお祈りです。すばらしいですね。

さて、とうとう、神さまのお使いがソドムの町にやって来ました。なんということでしょう。本当に悪い心をもった人たちばかりの町になっていました。けれども、神さまは、アブラハムのお祈りをしっかり覚えておられます。ロトと妻と二人の娘たちだけは、逃げるように教えて下さいました。その他の人たちは神さまに滅ぼされてしまいました。

・神さまは昔も今も、悪い人たちが世界に増えて、広がらないようにお守りくださるのです。
・私たちは今、イエスさまがお友だちとなってくださったのでお祈りできます。私たちは、神さまに守られているのです。

やってみよう

床にこどもたちが入る事のできる輪（ひも・ロープ・フラフープ）を２つ作ります。一方の輪に子どもが入り、「神さまが言いました。急いで逃げなさい」と言った時に、もう一方の輪に逃げます。「逃げなさい」とだけ言った時は逃げてはいけませんね。

「先生が言いました。急いで逃げなさい」も「おおかみが言いました。急いで逃げなさい」も動いてはいけません。神さまが言った時だけ、急いで逃げましょう。神さまのことばを注意深く聞きましょう。

３月１５日　創世記１９章１～２０節　【小学科上級・中学科】

ソドムとゴモラ

１．創世記19：１～14を読みましょう。

①ロトは二人の御使いをどのように迎えましたか？

②ソドムの町の男たちは、御使い1たちやロトたちに対してどのような態度でしたか？

③御使いたちは何をしにソドムへ来たのですか？　それはなぜですか？

④娘たちの婿は、なぜロトの話を信じなかったのですか？

２．創世記19：15～26を読みましょう。

①神さまはロトと家族に何を命じられましたか？

②ロトの妻は、なぜ振り向いたのでしょうか？

３．　創世記19：27～29を読みましょう。

①18章で、神さまとアブラハムの間でどのような話がありましたか？

②なぜソドムの町は滅ぼされましたか？ロトが救われたのはなぜですか？